

「2800字のレシピ、またはもうひとつの覚え書き」

元トウネ精米工場・中野町家担当キュレーター 加藤 巧

まずはじめに、次の条件があった。

・企画をする場所について：檀原市今井町

中世からの自治都市で、重要伝統的建造物群保存地区として選定されている。町の道組は格子状でありながらところどころが丁字になっており、見通しにくくなっている。場所によっては車の対抗が難しかったり、ドライブにはあまり向かない。その分日本においての町並みの保存活動の黎明期であった昭和30年代から現在にかけて、町づくり活動を続けてきている。

自治都市としての性格を現在まで残しており、町の外側と内側との境界ははっきりしている。かつては町の独自通貨「今井札」が出回っており、両替商で栄えた。「大和の金は今井に七分」といわれるほど栄えた時期があった。町の住人以外の町内での宿泊には、許可が必要であったなど独自の法規があった。茶人・今井宗久の生まれた地であり、茶・書など諸文芸文化も息づいた。

町から窺い知れるのは独自に育まれた構築的なシステムと封建的な性格、そして独立精神と作法。

展示空間として選んだのは、2つの建築物。1つは内装の新建材が朽ち、雨漏りのひどい箇所のみられる半廃屋でありながら典型的な町家づくりの骨組みを残していた「中野町家」。もう一箇所の元々精米工場を営んでいた「元トウネ精米工場」には数点の特徴が観察された。内部の構造から見受けるに元々は二軒の町家があったこと、室内に雨どいの名残がみられるように、かつて屋外だったところに建て増したエリアがあること（室内に井戸も残っている）、登ることのできない2階部分があり、天井を射貫いて空間を広く使っていたであろうこと、いたるところにコクゾウムシ（米などにつく虫）対策であろうブリキ板がパッチワークのように張り巡らされていること。最近までは什器や精米に使った道具などが、生活用品などとともに押し込められて、倉庫の状態になっていた。

・開催する時期：2015年の10月中旬から11月の初旬

今年は今井町の秋祭りが同時期に開催され、絢爛な山車が町の中を縫った。

・制作の補助費：35万円

協賛、機材協力などのサポートを諸関係から別途でいただき、補填をした。

そして、次のような状況があった。

・2015年、日本の多くの場所で土地に根ざすことを謳ったアートイベントが行われており、そこにはそれぞれの賛否があった。一方は社会装置の外側で自立しているアートを、地域の都合に迎合させるべきでない、という論調。もう一方で諸地域の担当側には、さまざまな表現物が「アート」の一語で呼ばれることもある状況の中で、表現物の持っている目的・方向性・性質などについてのマッピングが不十分であるように感じていた。立場に頓着せず、バランスのよい議論がなされる場が不足しているケースをよく見ていた。

・「羊による除草作業」であったり「千葉大学はじめとする町家の修繕活動」といった自律的な活動があり、今井町には素地が新しい取り組みと保全活動を同時に受容する素地があった。

・『はならあと』として今井町はじめ他会場で数十のイベントが同時開催されるが、そのすべてを事前に把握することは事実上不可能であった。

展覧会には次の機能を与えた。

・会場は2つ。行き来することで町の回遊が促される。構造的な道組を通り抜けることと展示や建築の持っている構造はゆるやかにリンクしている。

・駅から町へ向かう際に玄関口となりえる「中野町家」は、町家でいうところの「通り庭（※玄関から居間に至る土間の通路）」のような半公共の機能を備える。ここではワークショップ（宮田篤）や持ち寄り鍋（村上慧）などを随時開催する。

・展示会場の構造はコの字になっている。展示の最深部には折り返し地点がある。

・「元トウネ精米工場」は奥に行くほど暗くなっており、集中が促されると同時にプライベートな性質を備える。

会場には次が配された。

・「微分帖」（宮田篤）は、観客との直接のコミュニケーションが促される。くだけた雰囲気とは裏腹に、本の構造や他人や自分の話を読み合うときに生まれる仕組みのあり方が示される。展覧会も「微分」のように始点と終点が決まっていながらも、付き合い方が多様な本のようなものである。

・「住む」ことにまつわった活動＝生活を続けている村上慧は、「虫システム」によって、町家の中や会場内外の境界部分にルールをしつらえ、ビデオカメラを横断させた。私たちが近代的な思考で取り扱っている「敷地」のことや内側と外側との境界のことに意識を向け、仕組みや既定からの越境を示唆した。

・物事、それがたとえひとつの茶碗でも、「表面を削りとること・剥ぎとること」で立ち現れてくることや、見えなくなるものがある。ひとつの動作は、だからこそ時に簡単であるし、慎重でもある。当然、何かが削ぎ落とされるとき、<見えてくる/見えなくなるもの>たちは、実際にそこにある物質的なものばかりとは限らない。

・「描く」ことで何かの痕跡を残す、というひとつのやり方は、表現の古層から今まで変わっていない。今井の名が歴史に現れはじめる1400年前後、ルネサンス前夜であったイタリアでは、はじめて体系的に残る絵画技術の技法書が書き留められていた。（C.チェンニーニ「絵画術の書」）

配されたのは、「作品」という物質的な状態を持ちながら、同時にそれぞれの制作に関わってくる「行為＝動詞」でもある。それらは、<描く/削る/読む/住む/食べる/話す/見る/...>といった日常動作であると同時に制作言語でもある。

作るうえでの方法や動作は、丁寧に、真摯に続けられる。

以下のことが想定された。

- ・完全に遮蔽された空間のように、すべてをコントロールできる環境ではないため（本当はそんな場所はどこにもないのだが）、人、人以外の生き物、自然現象などによって意図した状況に変化が生まれる可能性が大きくなること。また、季節は秋から冬に向かう。1日の中でも、天気や時間による状況の変化に想いをめぐらせた。
- ・会場には危険箇所がいくつかあった。穴、井戸、スノコのズレ、天井の破れ、暗がりなど。
- ・人の考えも移り変わることを。

以下をしなかった。

- ・表現によって感傷に訴えかけること。
- ・会場の構造自体を作り手がやりやすいために大きく改変すること。
- ・展示の構成を今井町だけに適応させること。
- ・ことさらに自分たちのことを価値づけて内輪のみで盛り上がることを。

以下を覚書として

- ・特別なことをすることが全てではない。
- ・保存されるのは、物だけではない。
- ・理に適ったやり方があり、そうでないやり方がある。理に適っていることは「技術」とよばれ、保存されることがあるが、それだけが正しいわけではない。
- ・話をする場は大事だが、作り手が作った物があってそれについて話をする際には、現場の造形を第一に語るのを心に留めておく。

「百聞は一見にしかず」という諺は、英語にしたときに絵画が登場する。

“A picture is worth a thousand words.”
(一枚の絵画は千の言葉に価する)

- ・「つくる」話をするときに、「アートを」とか「町を」とかいうように「何をつくるか」を問題にしなければ、広く話をする事ができる。
- ・いつでも、擁護や批判や誤解は生まれる。理解がすぐでなくても、丁寧に接していくこと。仕事を全うしようとする事。
- ・特別に見えないものでも、人は何かを作り続けている。明日からも、それぞれの場所でそれぞれの生活があること。

以上を、約2800字のレシピ、または覚え書き（リマインダ）として。

本展は、骨組みだけを残して通り過ぎた。

(2016/3)